

まずは「やってみる」。地域や社会の現場で学生を育てる新しい学びの形

千葉商科大学

Chiba University of Commerce

「よそ者」の学生が挑む 地方の活性化に

『愛ひるがりさきほこる 弘前ウディング』。これは人間社会学部のプロジェクトがつくり出した、青森県弘前市のための地域活性化プランである。「選ばれた恋」というロマンチックな花言葉がある名産のリンゴ、そして400年以上の歴史をもつ弘前城。この2つの地域資源を活かし、弘前で結婚式を挙げれば、固く長く続く夫婦の絆を結ぶことができるのではないかと。そんな学生の発想から生まれたものだった。

学生を連れてフィールドワークを実施。人間社会学部開設以降は「地域プロデューサー養成プロジェクト in 弘前」と銘打ち、弘前の概要や観光の役割などを学内で事前学習をした上で現地に赴いた。自転車でも市内を巡り、リンゴの収穫や農家民泊を体験し、地域の人々と交流を重ね、町おこし企画を市に提案している。

「これからの地方は、新しい発想で新しい産業を興していく必要があると。よく言われる『よそ者、若者』ではありませんが、地域の人間ではない若い学生の視点や考え方は、地域活性化にうまく活かせると思うのです」。プロジェクトを率いる朝比奈教授は、学生を見守り励ます一方で、彼らの行動力や瑞々しい感性、ユニークな発想にいつも驚かされると言う。

現場で体験したからこそ 生まれる学びの説得力

2015年には観光庁や文部科学省等が後援する「大学生観光まちづくりコンテスト」への参加を視野に入れ、入念な事前調査をしてプロジェクトに臨んだ。それでも資料だけでは知り得ない情報は多く、地元の人さえ気づいていない魅力や、隠れた課題を対話や実体験から見出し、プランに落とし込んでいった。

「こうしたアクティブラーニングには、現場がもつ『説得力』があります。講義や文献で何となく理解したことよりも、現場に行行って実際に動き回り、直接見て聞いて体験したことの方がずっと学生の心に刺さってくるのでしょ」と朝比奈教授。大学へ戻り、地元の人々からのア

(右上)弘前市でのフィールドワークは2泊3日で実施。リンゴの収穫や農家との交流を通じて、農業や地方が抱える課題にも理解を深めていった。

(右下)観光名所や街なかへ実際に足を運ぶことで、さまざまなアイデアが生まれていく。厳しい気候の中、400年を超える歴史と崩れたことのない石垣をもつ弘前城のストーリーは、結婚式のアイデアを膨らませるきっかけに。

(左下)「大学生観光まちづくりコンテスト」では、1・2年生だけのチームながら、堂々としたプレゼンテーションとプラン内容が高く評価され、青森県知事賞を受賞。現在も実現に向けて活動中だ。



社会で役立つ実学教育を続けてきた千葉商科大学。その中でも、企業や地域と連携したアクティブラーニングのプロジェクトを次々と成功させているのが人間社会学部である。「現場で育てる」という新しい学び方に迫る。

取材・文／草薙敦子

● 地域とつながる人間社会学部のアクティブラーニング



千葉商科大学
人間社会学部
学部長
朝比奈 剛 教授



1年生が入学直後から制作に取り組んだ『るるぶ』と『ソーシャル』。この成果が4年間の土台となる



真間行灯ライトアッププロジェクト

地元の小学生が製作した手づくり行灯で、市川市の真間山弘法寺の石段をライトアップする企画を運営。弘法寺、真間地区の商店街有志、市川市、近隣小学校のPTAとともに、地域が一体となったお祭りを開催し、夜の寺社に幻想的な光の道をつくりあげた。2回目の開催となった2016年は、地域の小学校との連携が前年の1校から5校へ拡大。参加人数や行灯の数も増加し、お祭り当日も大変な賑わいを見せた。



さんむ田んぼアートプロジェクト

色とりどりの稲を使い千葉県山武市の田んぼに絵を描き出す「さんむ田んぼアートプロジェクト」。このプロジェクトは、山武市・福島県相馬市・神奈川県横浜市という3つの土地で、田んぼアート制作を同時進行で行う「大地を繋ぐ田んぼアートプロジェクト」の一環として実施。互いの土地を行き来し、農の中に根ざしたアートを通じた交流を行っている。また相馬市との交流から、被災地復興支援についての理解も深めている。

実学教育を長年実践してきた同学に、人間社会学部が誕生したのは2014年。インターンシップに参加した学生が大きく成長して帰ってくる様子を何度も見てきた朝比奈教授は、「新しい学部をつくるなら、積極的に学生を大学の外に出し、現場を体験させるべきだ」と考え、同学部の教員陣はさまざまな体験型プロジェクトを用意した。

1年次には全員が雑誌制作に参加する。過去3年で観光情報誌「るるぶ」や、企業のソーシャルビジネスを紹介する冊子「ソーシャル」を制作。地域や企業への取材・編集を通して、コミュニケーションスキルや発信力を修得するだけでなく、多様な仕事との出会いや働く人々との交流を、将来のキャリアについて考えるきっかけにすることも狙いの一つだ。

将来のキャリア設計にも
つながるアクティブラーニング

まずは大学で学問から学び、実体験から結論を導き出し、それを発表し、事後学習として再び学問へ紐づけていく。このサイクルを繰り返し返していくことが人間社会学部のアクティブラーニングであり、そして千葉商科大学が掲げる「やってみる、という学び方。」である。

Information

千葉商科大学



巣鴨高等商業高校(1928年)を前身として1950年に開学。商経学部、政策情報学部、サービス創造学部、人間社会学部、国際教養学部の5学部7学科を擁し、専門的知識と幅広い教養を身につける「実学教育」を展開する。採用意欲の高い企業をネットワーク化した「CUCアライアンス企業」約690社(2017年1月現在)と連携するほか、合同企業セミナーや学内選考会等、企業連携キャリアプログラムも豊富だ。

● DATA

千葉県市川市国府台1-3-1
TEL 047-373-9701 (入学センター)
URL <http://www.cuc.ac.jp/>

るるぶ」や、企業のソーシャルビジネスを紹介する冊子「ソーシャル」を制作。地域や企業への取材・編集を通して、コミュニケーションスキルや発信力を修得するだけでなく、多様な仕事との出会いや働く人々との交流を、将来のキャリアについて考えるきっかけにすることも狙いの一つだ。

1年目にこの経験をする、学生自身も自分の成長やアクティブラーニングの面白さに気がつき、他のプロジェクトにも自発的に参加していく。2015年度は学部在籍数200名に対し、アクティブラーニングのプロジェクトに参加した学生はのべ700名以上に上ると言う。

「提携する地域や企業はどこも

協力的で、ひとつのプロジェクトをきっかけに、『これもやってほしい』と新たなプロジェクトにつながることもあります。アクティブラーニングは学生が成長できるのはもちろん、地域も喜んでくれるし、教育や研究にフィードバックされて教員も成長させてもらっている。大人たちが学生に元気にしてもらっているようです」。そう語る朝比奈教授は笑顔だ。

「いまこの国に必要なのは、社会の課題をビジネスで解決し、新しい価値を生み出せる人材です。これからの日本のためにも、学生を、現場で育てる」という、この新しい大学教育のスタイルをどんどん広げていきたいと考えています」。